佳作

夢の実現に向かう私へ

青森県おいらせ町立木ノ下中学校
３年　蛯名　凛羽

「あれ？　地震？」
という誰かの声とともに、今まで体感したことのないほどの強い揺れを感じ、布団から起き上がった。

今年の３月 16 日、私たちは中学校の修学旅行で宮城県気仙沼市に滞在していて、まさに眠りにつこうとしていた 23 時半過ぎのことだった。すぐにテレビをつけ、地震の状況を確認しようと見始めたところ、部屋の窓の外から見える気仙沼港の景色と、テレビ画面に映るニュース映像が同じ場所でさらに驚いた。ニュース速報では、震度５弱と報じていたが、ホテルの部屋が５階にあったことから今までに体感したことのないくらいの強い揺れに感じた。館内に響き渡る避難警報が胸を締めつけ、不安をあおった。

11 年前の東日本大震災の時、私は３歳だった。だから、これほど強い揺れは体感の記憶がない。窓の外を見ると、真っ黒なガラスに自分が映っていた。もしかしたら、津波がこのガラスを突き破ってくるかもしれない……そう思うと、涙が止まらなくなってしまった。

ちょうどその日は、修学旅行の１日目で、岩手や宮城の被災地を見学し、東日本大震災での被害の大きさ、自然が猛威を振るった時の恐ろしさを目の当たりにしてきたばかりだった。これから津波が来るかもしれない、電気が止まるかもしれない。誰かの「命が危ないんじゃない？」という声に、私たちの恐怖は最高潮に達した。
「ドンドン！」
「大丈夫？　ドア開けて！」
ドアを強く叩く音と、生徒を心配し各部屋を見回っている先生方の声が聞こえ、少し不安が和らいだ。

私たちはすぐに避難できるように荷物をまとめ、ロビーに集合した。怖くて泣いている子、不安の声を漏らす子……私は、ただその場に立ち尽くし、魂を吸いとられたように、茫然としていた。その時、ホテルの従業員の方々、ツアー会社の方々、そして、その場にいた大人の方々が、生徒に寄り添い、心強くもあたたかい声掛けで対応してくださった。先生だけではなく、大人の方が一丸となって、私たちの恐怖を少しずつ払ってくれたのだ。誰かの笑顔が伝染し始めた頃、津波警報が解除された。私たちは安心して眠りにつくことができた。

２日目――。行く予定だった松島町や仙台市は気仙沼市よりもさらに震度が強く、被害が大きかった。停電が発生、水道は断水、高速道路が通行止め、新幹線は脱線し、ライフラインに大きな影響を与えていたので、予定していた場所に行くことができなくなった。私たちは、このまま修学旅行が終わるのも仕方ないことだから、無事に帰れることに感謝して、戻る覚悟を決めていた。

ところが、私たちの事情を知った岩手県の事業所の方が、戻る時に自分の所を開放するから思い出づくりにどうぞ、というのだ。すぐにツアー会社と先生方で協議し、地元の方は道路にひびなどないか、巡回してくださった。私たちは、奇跡の代替え案による修学旅行を継続できた。何より、赤の他人のあたたかさの放つパワーにやられた。こんなにまでしてもらう修学旅行が他にあるだろうか。

「修学旅行で何買った？」

「修学旅行で有名人見た？」

よく聞く言葉だ。何も買えなくても、映える写真が撮れなくても、最高の修学旅行だった。想定外続きの出来事ではあったが、地震の怖さだけが思い出になった人は誰もいない。何も知らない第三者は、「かわいそう」だと言う。なかには「私たちなんかね、……」と自慢話でマウントをとろうとする同年代もいる。

私は真実を知ってほしい。取り上げられることのないニュースを。少なくとも、今回携わった大人の方々を見て、私たちは、こんな大人になりたいねと誓ったこと。それぞれ、違う仕事に就いたとしても、あの時のような大人になって、社会をつくりたいと思ったこと。中学生の青くさい夢かもしれないが、私たちは、かっこいい大人がつくる社会を目指す。子どもを不安にさせない社会を。

私も将来、教師になるという夢が生まれた。大人だって、あの夜は怖かったと思う。臨機応変に対応してくださった先生方、寝る時間はあったのだろうか。疲労も相当だったことだろう。それでも大変そうな表情は見せずに、目配り気配りをしてくださり、笑顔で全員が「ただいま」を言えた時、先生の偉大さを知った。私もそんな教師になりたい。

「未来の私へ。かっこいい大人になっていますか。孤独を感じる夜はありますか。大丈夫。赤の他人は優しいのです。一人じゃないよ。大変な時は、人のために動こうとしていた大人の先輩を思い出して。手をつないで、前へ進んで道を切り開いていってね。」